

2. 柔道の歴史と技法—起倒流柔術の影響について

筑波大学名誉教授 藤堂 良明
中央区柔道会顧問 保科 素
元東京武道館師範 毛利 修
講道館 村田 直樹
講道館 桐生 習作

2. A study on history and techniques of Judo: Succession of *kitoryu-jujutsu*

Yoshiaki TODO (Professor Emeritus, University of Tsukuba)
Makoto HOSHINA (Advisor of Chuo-ku Judo Association)
Osamu MOURI (Former Shihan of Tokyo Budo-kan)
Naoki MURATA (Kodokan Judo Institute)
Shusaku KIRYU (Kodokan Judo Institute)

Abstract

Jigoro KANO preserved *kitoryu-no-kata* and developed it as *koshiki-no-kata*. The purpose of this study is to clarify the technical influences from *kitoryu* to judo. The results are shown below:

- (1) Kano refined *koshiki-no-kata* more safety than *kitoryu-no-kata*. Some movements of *kitoryu-no-kata* were grasping opponent's neck to brake his balance. However, such a dangerous movements are not shown in *koshiki-no-kata*.
- (2) *Nokoriai* that is a kind of training method of *kitoryu* was made in middle of 18th century. The purpose of *nokoriai* is to confirm keeping *hontai* (steady posture) and braking opponent's balance for each other.
- (3) *Midaregeiko* that is more free training method than *nokoriai* was made in the end of Edo period. It become the origin of judo's *randori*. The principle of *hontai* and braking for opponent's balance are promoted in judo. Also, *yoko-wakare*, *tani-otoshi* and *seoi-nage* which are the throwing techniques of judo are taken over from *kitoryu*.

1. はじめに

嘉納治五郎（以下・嘉納）は、若い頃に起倒流や天神真楊流柔術などを学び明治15年（1882）に講道館柔道を創始したとされる。嘉納は講道館を創設すると、起倒流柔術が高遠な術理と術技を表す優れた柔術の「形」であるとして「起倒流の形」として残し、やがて「古式の形」に改名して保存した。これまでも起倒流柔術に関しては、老松信一の「起倒流柔術について」や大谷崇正の「起倒流の形について」などの研究があり、その系譜や教習過程については書かれているが、いずれも『本體』『天卷』『地卷』などの基本伝書を基にした考察である。また「起倒流の形」と「古式の形」との違いや、起倒流の稽古法「残り合い」の技法については触れられていない。

そこで本論文では、まず起倒流柔術の起こりと系譜を見るとともに教習過程について探る。次に、嘉納は「起倒流の形」をやがて「古式の形」として残したが、両者の技法の異同について考察する。最後に、起倒流柔術における「残り合い」の技法を明らかにして柔道乱取への影響について考察したい。

本論文で使用する文献資料は、起倒流柔術に関しては基本伝書とともに、詳しい技と思想が書かれた江戸後期の吉田奥之丞有恒著『起倒流柔術記録全』を使用する。また講道館柔道に関しては、嘉納の著述及び講道館雑誌『有効の活動』などを中心に論を進める。

2. 起倒流柔術の起こりと系譜

起倒流柔術は、茨木又左衛門俊房（号は専齋）によって創始された近世初期の流派である。近世初期は戦国乱世の気風が残っており、まだ鎧を着用しての鎧組討技に実用性が求められていた。徳川三代将軍・家光の頃、剣術では柳生但馬守宗矩（1571-1646）、柔術では茨木俊房がそれぞれの分野で天下一と称されており、茨木は武芸をより深く研究しようと柳生家に入り、二人は技の原理を究明しようと東海寺の沢庵禅師（1573-1645）に願い出たのである。沢庵は熟考の上、宗矩には『不動智神妙録』という書物を、茨木には『本體』と『性鏡』の二巻を与えてその趣旨を教えたのである¹⁾。

寛永14年（1637）、柳生三厳が著した『月の抄』の中に「乱之事又左衛門工夫之目録」として、茨木が自ら構想した「乱目録」を柳生宗矩に進呈した様子が記されている。その中には「体スクナルニヨリ、勝アル心ナリ。出テ入ル心持。車、敵随イマハリ居ル身スグナリ。請、拍子、イキノ大事」²⁾と記されており、体を真っ直ぐにし回転時も真っ直ぐな姿勢を重んじ、リズムや請身、呼吸も大事であると書かれている。そして起倒流という名称については、「右之一巻ハ兵法之心持ヲ以、奇妙得心誠ニ神妙ニカナヘル処ナリ。然しドモ尋入、たよりなきにより、名ヲ乱ト名付、右之一巻ヲ書シテ心持ヲ沢庵へ御物語申セバ、則起倒流トあそはし、習ノ心持ニ模稜ノ手ト名付給也。老父モ一卷ノ奥ニ筆ヲくはえて、兵法ノ以テ自由分別鍛錬、乱起倒流ト相定候」³⁾と記され、茨木が考案した「乱」を沢庵禅師に語ると沢庵は直ぐに起倒流と命名し、当初は起倒流乱であったことが窺える。

ところで、この起倒の意味について『起倒流乱授業目録』⁴⁾には次のように書かれている。「古-徳ノ曰、地ニ因テ倒ルル者ハ、地ニ因テ起ツ。言ウ所ノ地ト云フハ彼ノ四相ヲ指ス。住-相ノ者ハ倒レ、離-相ノ者ハ起ツ。起倒ノ名由テ設タル所也。（書き下し文に改める、筆者）とある。「相」とは外に現れた姿・形・ありさま・外見を表しており、起倒の文字は相に居付く者は倒れ、そこから自由になる者は起つという意味でつけられたのであった。さらに、同書には茨木が創作した技として、基本となる体、車、請、左右、前後の五種の技の原理と、奥として行連^{ゆきつれ}

行違、行当、身碎、谷辻の5本の名称が記されていた（図1参照）。また実戦における15本の技（外物、取合、引落、後話、錨責、嵐、風車、楯合、拔身、生捕縄、坂、橋、水中、船、馬上）も記されていたのである。

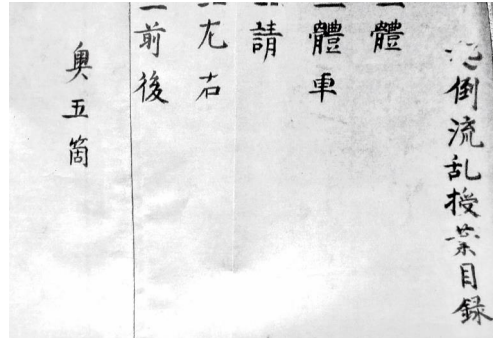
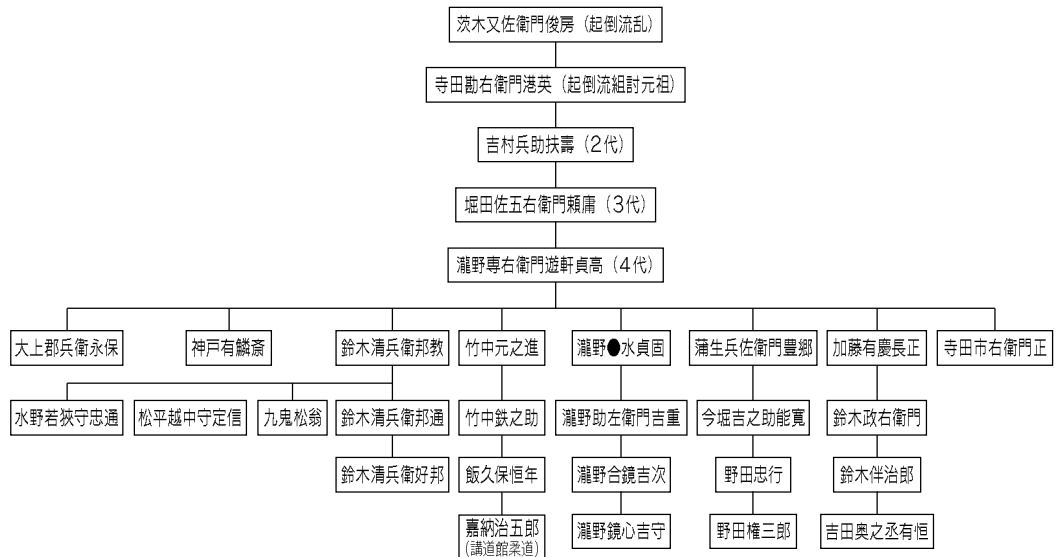


図1 起倒流乱授業目録の内容

茨木俊房を継いで寺田満英（幼名・正重）が現れ、寺田は「起倒流組討と改る元祖」⁵⁾とされ起倒流組討（柔術）の名称で広めていく。満英は身長151センチメートルの小柄であったが、武者修行中に沢庵について不動体不動智の妙理を発見し、また林羅山に儒学を学び一家をなしたのである。

ところで、丹波福知山の朽木侯の師範を勤め京都で指導を行った寺田正浄は享保14年（1729）に『登假集』を著わしている。その中で「正重己に勝、私に勝、人欲に勝て、我を放れ放るる道を早く得させん事を工夫し、五巻の書を編み、十四形の取形をもって、心氣を顕はし体の直き事を教へ、静にして柔らか成る所を教ゆ」⁶⁾と書かれている。この書によると、寺田満英は自我を離れ人欲に勝つ道を会得させる為に「五巻」の書を整え14本の「形」を編み出したことが窺える。ただし『本體』『性鏡』に関しては、前述したように沢庵の教えを受けて茨木が創作したも

表1 起倒流の系図



（『武芸流派大事典』『起倒流柔術記録全』より）

のとなすと、寺田は『天巻』『地巻』『人巻』を書いたといえる。

満英の門には二代・吉村兵助すけなが扶寿が出て松江の藩士にして同門に傑出し、三代・堀田佐五衛門よりつね頼康は起倒流の中興の功労者として大坂で広め、四代・滝野遊軒貞高は享保年間に浅草三筋町で多くの門人を教えて江戸に流布するのに貢献したのであった（表1参照）。

第4代・滝野遊軒の弟子には鈴木清兵衛邦教や竹中元之進、蒲生兵左衛門豊郷、加藤有慶長正などがおり、後には鈴木派、竹中派、野田派へと受け継がれ、嘉納は竹中派の飯久保恒年に起倒流柔術を学んだのである。

3. 起倒流柔術の教習課程

流派が成立する条件としては、天才的な人物の出現や教習過程の整備、技術体系の整理などがあげられる^{注1)}。それでは起倒流柔術の教習過程はどのようなものであったのだろうか。修行者は入門すると、まず「五巻」の書の一つである『本體』を受けられ同時に「形」を師範より学ぶのである。やがて、修行が進むにつれ『天巻』、次いで『地巻』さらに『人巻』を授かり、印可の際には人間の性、心、気の組み合わせが盛り込まれた『性鏡』を授かるのであった。『本體』は修行者に最初に授けられる教えであり、次のように書かれている。

「本体は体之事理也。専ら形を離れ氣を扱ふ。己に正しき理を得ざれば氣を扱ふを知らず。静貌静氣を得る所に至れば、敵之強弱能く徹す。強弱通達せば、則ち千變万化敵を制せざる無し。是則ち虚実に中る。本を為すは、己に体之正を務むる。故に本體と云のみ」⁷⁾（漢文を書き下し文に改める、筆者）と記されている。本体とは体の事理であり「形」を離れて氣の扱いを学び静貌静氣を得れば、敵を制することが出来ると一般的に解釈できる。

しかし、江戸時代に実際に起倒流柔術を修行した人の『本體』の解釈には、より詳しい考察が試みられている。今回取り上げるのは、吉田奥之丞有恒著「『起倒流柔術記録全』（以降・柔術記録全）である。吉田は富山範士であり文政7年（1824）に起倒流柔術に入門し、以後、鈴木伴治郎重強より『本體』、『天巻』、『人巻』を伝授されて起倒流を指南する。鈴木逝去後には吉田義直より免許皆伝と『性鏡』を授かり、天保7年（1836）に本書を著わし、富山藩では柔術剣術師範として白銀5枚を受け、剣術は天真白井流の流祖・白井亨義謙に学んだ人物であった。

この『本體』について『柔術記録全』には次のように述べられている。「本体ハ体之事理也」の解釈として、「事ハ柔ノ業也。理ハ心理ナリ。業計ニテハ活道セズ。亦死者座禅ノ如ク心理計ニテハ業活用セズ。故に業ヲ修行シ心理ヲ練リ、事理一致ニシテ熟得シタルヲ体ノ事理ト云」⁸⁾と記され、事を業として理を心理としてとらえ、事と心理の両方を磨いて事理一致の境地を目指すことが求められた。またこの事理一致した境地を本体としたのである。次に、「形」と「氣」に関しては「専ら形ヲ離レ氣ヲ扱フ」と書かれている。この言葉の解釈について、吉田は「取形ノ所作ヲ離レ、敵ノ形ヲ忘レ我軀ヲモ忘レテ、天地一帯ノ空機ヲ取扱フ也。但シ、敵ノ氣ヲ扱フ時ハ相氣ト成リテ敵モ又其氣ヲ請ル故、業モ活用セズ。依テ天地一軀ノ空機ヲ扱フ時ハ、敵ハ引網ノ内ヘ入りタル魚ノ如シ」⁹⁾と述べ、「形」や相手の所作に捉われず、天地一体の空機（天機と地機が一体となる）を扱う重要性を説いている。この空機については、天真白井流の「真空」の教えの中に「当流ノ真空ハ天機地機通フテ萬物ノ生ル空機言語ニモ述難キ真実ノ空ト云フ心ニテ真ノ空ト云フ。此空機ニ軀心ヲ和シテ其ノ空機ヲ一圓ニシテ敵ヲ包ム」¹⁰⁾と書かれ、天地万物を生成する根源の「氣」を意味しており、自分の心身を真空にして敵を包むのであると説かれたのであった。

また、相手と立ち向かう際には「静貌静氣ヲ得ル所ニ至ッテ敵ノ強弱能徹ス」と記され、静かな身体と冷静な気を得ることが重視されていたが、その境地に至ることは非常に難しかった。そこで吉田は「鍊丹自強シテ丹田ヲ體ニナシ惣身ヲ虚体ニシテ空機ヲ充実シ、少シモ直ム事ナク安然トシテ其技ヲ忘ルル時ハ、吾カ天真ノ一機敵ノ強弱ニ自然ト能徹シ、求メサレ共制セザル事ナシ」¹¹⁾と記し、丹田を鍛え全身の力を抜き天地一体の空機を充実させ、技を意識しない時は如何なる敵をも制せると説いたのであった。こうした考え方は、天真白井流・白井亨の「練丹の法」の中に強く見られ、「腹ハ鍊丹ヲシテ下腹ヲ持チ、鍊丹ノ修行重レハ体モ自然ト和カニ成ル。惣身モ腹ノ内ヘ入スル事自由ノ觀念調フナリ。此腹ト空機ト自然ニ通フ」¹²⁾と記され、鍊丹により下腹に適度な緊張を維持する修行を行えば身体も自然と柔らかになり、天地一軀の境地に至れるとされたのであった。こうしてみると、吉田は21本の「形」の修行により最終的には「形」や相手の技にも捉われない、より高いレベルの「気」（天地一体の機）を体得することを目指したといえるのである。

次の教習過程として修行者は『天巻』を授かるのだが、次のように書かれている。

「起倒は、をきたおると訓ず。起は陽の形、倒るは陰の形なり。陽にして勝ち、陰にして勝ち、弱にして強を制し、柔にして剛を制す。我力を捨て、敵の力を以て勝つ。然らずして吾が力を頼み、我力を出す心あらば、勝利全からず。」¹³⁾

つまり、起倒とは立っても倒れても相手を制せなければならず、その為には自分の力を捨てて相手の力を利用して勝つことが説かれた。そうではなく、自分の力に頼ると勝利することはできないと書かれている。この相手の力を利用して勝つ原理は、やがて「柔の理」と呼ばれ、今日の柔道においても重んじられていくのである。

『地之巻』には、「敵に柔剛強弱の事」「無拍子の事」「調子の事」「位の事」「先々先後先の事」「水上之胡芦子の事」「気体の事」「志気力差別の事」「前後際断の事」の九つの教えがあり、勝負の際には力みを避けて自在な柔らかな動きの必要性が説かれた。そして、『人巻』では起倒流を体得するために編み出された21本の「形」名が列記されており、最後に修行者は『性鏡』巻で、虚実の関係や陰陽の二気が偏らず適度であること、また人間の性・心・気の組み合わせについて学ぶのであった。

4. 起倒流柔術の技術体系

起倒流が作られたのは江戸初期であり、まだ戦国時代の余波が残っていた時代である。起倒流の開祖であった茨木俊房は、体、車、請、前後、左右を基本に、実戦の技として外物、取合、引落、生捕縄、水中、馬上など15の技を拵えた。やがて、起倒流組討の初代・寺田満英により「表の形」として體、夢中、力避、水車、水流、引落、虚倒、打碎、谷落、車倒など14本、「裏の形」として身碎、車反、水入、柳雪、坂落など7本が作られた。この表14本と裏7本の「形」は修行者にとって必須の技であったが、重い鎧をつけての鎧組討の「形」であったため、人間の急所を当てる当身技よりも投技に重きが置かれたのである。また、『本體』の中で「形を離れて気を抜う」と書かれていたように、「形」は大切であるが、修行を積むに従い「形」の所作に捉われず気を磨くことが起倒流の重要課題となったのである。

18世紀初期に書かれた寺田正浄の『登假集』には表14本の「形」の名称は記載されているが、そのやり方については書かれていない。しかし、14本の「形」の目的について「取形・所作を以て気を導くといへども、人を制する業ゆへ、いよいよ人欲を離れがたくして、其業に一生活くられ、

克己に至る所^{および}及がたし。是以て、正重己^{おのれ}に勝、私に勝、人欲に勝て、我^がを放^{はな}れ放るる道を早く得させん事を工夫し、五巻の書を編み、十四形の取形をもって、心氣を頭はし^{なわ}し体の直き事を教へ、静かにして柔か^{やはら}成る所を教ゆ。」¹⁴⁾と記されている。つまり「形」は氣を導く目的で拵えられたが、人を制する技であるから相手に勝つことにとらわれ克己に至ることができない。そこで、寺田正重は14本の「形」と五巻の書によって、心氣のあり方及び前後に傾かない姿勢を教え、静かにして柔かなることを教えたと言われたのである。

ところで、19世紀初期に書かれた『柔術記録全』の「起倒流柔術捕方之大旨」には、14本の「形」と無段7本の「形」の内容や心構えが詳しく書かれている（裏7本を無段7本と記載）。14本の「形」の名称は、體、夢中、力避、水車、水流、引落、虚倒、打碎、谷落、車倒、鋸取、鋸返、夕立、滝落であり、無段7本は身碎、車反、水入、柳雪、坂落、雪折、岩波であった。この21本の「形」について、「本ヨリ当流ハ極意ニ至リテモ傳計ニテ十四ノ形ト無段七ツ此外ハ形ハ無シ。変化シテ五十共百共千共極リナシ。此数極ラヌ処ニ微妙ノ真理アリ」¹⁵⁾と記され、21本の技が無限に変化する所に真の術理があると書かれている。また同書には、「当流ハ十四ノ形ヲ此體一ツニ捕ル心ナリ。故稽古始ニハ體一ツヲ捕ル也。」¹⁶⁾と記され、起倒流では14本の「形」の中でも特に一本目の“體”を重視したことが窺える。

“體”の方法については、互いに礼をした後、「丹田ヲ持チ、虚体トナリテ立居ル受方ヨリ腹之所ト背ノ所之上帯ヲ持テ横之方ヘ引ク。捕リ方引クに乗り込、左ノ手ニテ向フ之後ノ上帯ヲ持チ、右ノ手ヲ向フ之頭ノ上へ上ケテ右ノ足ヲ折、左ノ足ヲ立、腹氣ト空氣ニテ落ス」¹⁷⁾と記され、取は丹田を保ちながら全身の力を抜き、受が取の帯の前後をつかんで横へ引き出すのに乗じ、左手で受の後帯、右手で受の頭上へ上げ、右膝をつきながら受の体を引き落とすという技であった。なお、相手を倒す際の氣の扱い方として、丹田に氣を納めつつ、自分の氣を天地自然の氣と一体化することが求められたのである。このように“體”の所作には、相手の力に逆らわずして勝つ理合いが含まれており、さらに天地自然の氣と自分の氣を一体化するための氣の扱い方も含まれていたのである。ただし最後の所作には、取は受の頭に手をかけて投げ落とす方法をとっており、戦場における武術的色彩の濃い技であったといえる。

14本の「形」稽古の際には、「取合ノ内ニ□フコト不レ宣。唯摺リ足ナリ。□フト呼吸□フ也、又掛声セス。掛声モ呼吸ニ障ルナリ」¹⁸⁾と記され、稽古中の足さばきは摺り足で行い、呼吸が乱れるので掛声はしないことが説かれている。こうした心得が説かれた背景には、鏡組討ちが目的であった起倒流の「形」では、身体が不安定になるような足さばきや呼吸の乱れを招くような掛声は非実戦的であると考えられたからであろう。

一方、裏七本の「形」については『登假集』には、「裏七形を不取段といふこと、不断修行に氣の段を取らぬという儀なり。勝負の業にも自然に叶ふ事なり」¹⁹⁾と記され、氣の段を取らず各技を区切ることなく連続して行う方法であり、実戦に適ったものであると説かれている。また『柔術記録全』には「譬敵ヨリ大急ニ掛ル共先ツ氣ヲ丹田ヘ落シ治メテ後ニ変ニ応ル也。当流ノ修行ハ心氣ノ修行故専和ラカニ取ル事肝要ナリ」²⁰⁾と記され、たとえ敵が急に掛ってきて先ず氣を丹田に納めてから変化に応じることの大切さが説かれており、起倒流の修行目的は心氣の修行であったことが窺える。こうした普段から丹田に氣を納める修行を積んでおくと、実戦の場においても凝り固まらず柔らかに対処できるとされたのである。

5. 「起倒流の形」と「古式の形」との異同

嘉納は明治20年頃に講道館の「形」として「起倒流の形」を残したが、同34年には「古式の形」に名称を変える。そのため両者の技には共通する部分が多いが、一方で技の名称や掛け方などに違いもみられる。今回は「起倒流の形」の詳しい説明が掲載されている『柔術記録全』（1836）と、講道館雑誌『有効の活動』（1921）に掲載された村上邦夫の「古式の形」とを比較してみたい。

村上は「起倒流の形を講道館では古式の形と称するのであります。それでいふまでもなく、これは講道館で出来た形ではありません。併し幾分か嘉納先生が改良された点もあります。私は先生の御教に従って説明して見ます²¹⁾と述べており、「古式の形」は嘉納が「起倒流の形」に改良を加えたものであることが窺える。しかも、村上の「古式の形」の解説は嘉納の教えに従い執筆したものであることも見てとれる。なお、「古式の形」の解説には裏7本の技に関する記述がないため、「古式の形」表14本と「起倒流の形」14本との比較のみを行った。

まず「形」を行う際の心構えとして、「起倒流の形」では「摺り足ナリ、又掛声セズ。掛声モ呼吸ニ障ルナリ」と書かれていた。一方、「古式の形」の“體”を例に挙げると「受は静かに歩いて捕に近づく、その歩き方は、手が振れない程度の速力で、足の裏が軽く畳をする様にし、～中略～、一度呼吸を入れて氣を静める²²⁾と記され、両者とも摺り足で行い呼吸を重んじ「氣」の扱い方を意識している点は同じであった。

しかし、「形」の名称において表記は同じだが読み方が異なる技として、夢中（ムチフ→ユメノウチ）、水流（ミツナカレ→ミツナガレ）虚倒（ムナタオシ→コダオレ）、車倒（クルマタラシ→クルマダオレ）の4本に違いがみられ、漢字が異なる技として（引落→曳落）があり、14本の技のうち5本に名称の違いが見られた。

技の掛け方では、「起倒流の形」の“體”“引落”“夕立”において「古式の形」との違いが見られた。起倒流の“體”は「4章、起倒流柔術の技術体系」でみたように、相手の頭部をつかんで首を押し下げて投げるといった荒々しく実戦的な技であった。一方、「古式の形」の“體”では受が取を後腰に引き付けて投げようとした際に、「捕は引かれるその力に順応しつつ左脚を受の後ろに運び、姿勢を崩さず體を運び、左手を受の後腰に当て、右手は受の左胸の上部にあて、左手を当てた処を支点として右手で受の體を受の後ろにおし制します²³⁾と書かれ、受が右の腰投をかけようとするのに対し、取は右手を受の左胸、左手を受の後腰にあてて背後に崩して倒すという内容である。「起倒流の形」では、取が右手で受の頭部を押し下げて投げていたが、「古式の形」では取は右手を受の胸部に当てて崩す方法に改められている。安全性への配慮がなされているといえるだろう。

同様の違いは「古式の形」の“曳落”にもみられる。「起倒流の形」の“引落”では、「受は突っかかり右手で胸くらを取ろうとする。取は左手で受の右手首を持ち右手にて受の頭の上より空機とともに撫で下ろし、左足を後ろへ開き引落す（『柔術記録全』の要約）」とされ、取は受の頭上を撫で下ろし引き落としていた。一方「古式の形」では、「取は左手で受の右手首を持ち、右手で受の右肘をつかんで引落す」となっており、右手の使い方に両者の違いがみられる。また、「起倒流の形」の“夕立”は「右手を受の左首筋にかけて、左膝をついて腹氣と空機で引き落とす（『柔術記録全』を要約）」と書かれ、相手の首筋に手をかけて引き落としているのに対し、「古式の形」の“夕立”では取は左手で受の右腕を左脇に抱え右手で受の襟をつかんで引き落とすとなっている。「起倒流の形」は相手の首筋に手をかけて引落としているのに対し、「古式の形」では

襟をつかみ引き倒している点に違いが見られた。このように鎧組討を主とした「起倒流の形」は、相手の首や頭部を制して投げ落とすことが実戦の場では有効な手段であったといえるのである。

「形」の順番に着目すると、技の内容が入れ替わっている部分が見受けられる。「起倒流の形」の7番目の虚倒（ムナタオシ）は、左足を受の後方に踏込み左手で受の左腰深く差し入れ右手で受の右前腰にあて投げ落とす技であり、「古式の形」の8番目の打碎（うちくだき）に相当し、「起倒流の形」の8番目の打碎（ウチクダキ）は、「古式の形」7番目の虚倒（こだおれ）に近い内容であった（表2参照）。

表2 「起倒流の形」と「古式の形」の違い

起倒流の形		古式の形	
順番	技名		技名
2	夢中（ムチフ）	→	夢中（ユメノウチ）
5	水流（ミツナカレ）	→	水流（ミツナガレ）
6	引落（ヒキオトシ）	→	曳落（ヒキオトシ）
7	虚倒（ムナタオシ）	↘	虚倒（コダオレ）
8	打碎（ウチクダキ）	↘	打碎（ウチクダキ）
10	車倒（クルマタオシ）	→	車倒（クルマダオレ）

嘉納は大正期に入ると、柔道の目的として従来の「体育（身体の強健）、勝負（武術の習得）、修心（精神の修養）」の他に「慰心法としての柔道」に言及する。この「慰心法」とは「単純なる筋肉の快感より高尚なる美的情操に至るまで快楽を得るを目的として修行するは、これを慰心法として柔道を修行するという。」²⁴⁾と述べ、筋肉運動により汗をかき気分が爽快になるなどの快楽はもちろん、「形」によって美的情操を養うことまでが含まれたのである。こうして、嘉納は「形」においても安全性を図るとともに、技の順番にも配慮して美的情操を高める為の工夫を盛り込んだものと考えられるのである。

6. 起倒流柔術の「残り合い」から乱取へ

これまで見てきたように、起倒流柔術は「形」中心の稽古法ではあったが、やがて新たな稽古法として「残り合い」が生まれる。18世紀中頃に書かれた『燈下問答』には次のように書かれている。

「十四形ノ修行ニ、請立ノ残ルト残ラヌト云ウ事アリ。残ラヌ道アリ哉。答テ曰ク、其道ヲ論ズル事当流ノ本意ニ非ズ。唯取形ヲスル人、請立ノ人、同気ニ成テ、共ニ己ヲ磨ク分也。然ドモ、折々其残ルベキ道理ヲ見テ残り、勝気ヲ制シ、偏倚スル処ヲ顕シ、虚実ヲ知ラスル取形也。故ニ、残ルモ稽古也。一ツノ業ヲ直ス事、一ツノ業ヲ直スニアラズ。一ヲ以テ、一体ノ位ヲ本性に至ルノ導キ也。」²⁵⁾

（形の稽古中に、請立が残ったり残らなかつたりということがある。残らない道理はあるのか。それに対する答えは、ただ取形と請立とが同じ気持ちになり、共に自分を磨く場である。しかし折々に、相手が残ってしまった時の道理を振り返ってみて、相手に勝とうといった気持ちを制し、本体と外れた所を見極め、虚実を知らせる形なのである。それ故に請立が残るのも稽古であり、一つの技を直すだけではなく冷静な心構えや本体の姿勢を確認する場である。）

この「請立ノ残ル」とは、14本の「形」稽古中に取の技が理にかなっていない時には受は無理に倒れない、といった形態であり、お互いが本体の姿勢や崩しが出来ているかを確認し合うもの

であった。こうした稽古法はあくまで「形」における攻防の延長といえるものであった。

やがて19世紀に入り、江戸時代後期に書かれた『柔術記録全』によると、「残合之事是ハ此術之穿鑿合ニテ十四之形ヨリ敵ノ変ノ自然ニ応シテ変化スルナリ。～中略～、又変化モ無理ナル業スル事ナシ。併勝負合ハ格別之事ニテ荒クモ和ラカニモ其技不極自然ニ応スル也」²⁶⁾と記されている。つまり、「残り合い」とは14本の「形」においてお互いが技を試し合うことが目的であり、相手の変化に応じて行う稽古ではあるが例え変化の際も無理な技を施してはならない、とされた。こうした考え方は『燈下問答』と同じであったといえるだろう。ただ「勝負合」という形態が新たに記載され、「形」において多少とも荒さも認められる稽古法が登場したといえるだろう。

それでは、この「残り合い」からどのように乱取に移行したのであろうか。起倒流柔術は腰技や横捨身などの投技が主体であった為、比較的自由に攻防できる乱取^{らんどり}が生まれやすい形態であった。嘉納の起倒流柔術の師匠は飯久保恒年^{つねとし}であり、飯久保の師匠には竹中鉄之助^{たけなかつのすけ}がいた。竹中は、幕末期の『起倒流組討心持目録』の中で「乱稽古」という用語を初めて使っている。^{注2)}

「常々乱稽古ノトキ浮木ノ如ク身ヲツカフベシ。敵ニ向ヒ胸騒キスル事アリ。ヨク心ヲ沈メ緩ト息ヲツキ取アツムベシ。組時息ヲ込勝テ後込タル息ヲツクヨリ早く残心シ後ヲ詰ル事、安閑無事ノ極ト思稽古スル事肝要也。是ハ稽古の格也。」²⁷⁾

(普段から稽古の時は水に浮く木のように身体を使うべし。相手と向かい胸騒ぎすることもあろう。その時は、心を冷静にしてゆっくりと息をつき向かうべきである。組む時は息を吸い、投げた時は息を吐く。より早く次に対処できるように残身することが安らかな境地と思つて、稽古することが大切である。)

ここで、竹中が使用した「乱稽古」とは「残り合い(勝負合)」よりも攻防がより自由に行われ、今日の乱取に近いものであったことが窺える。ただし、当時の稽古着は袖が肘上まででしかなく、下履も膝上まででしかない短袖短袴であった。そのため、袖を利かしての崩しは難しく、今日の背負投や体落のような手技は出来なかったと考えられる。しかも肘や膝はむき出しで怪我也絶えなかった。肘や膝が隠れるほどの長い稽古着の出現は、嘉納を待たなければならなかったのである。

嘉納は富士見町時代に上着を肘が隠れるほどの長さにし、明治41年(1908)には袖は一握りできる位にし下穿も膝下三寸(約9cm)と規定したのである。嘉納は後に、「昔は柔術の稽古は形のみによつたものであるが、維新の少し前から、残り合いということが行われ、それが発達して、乱取というものができたのである。」²⁸⁾と書いているように、幕末の「残り合い」から発展して乱取が生まれたことは間違いのないだろう。

最後に、起倒流柔術の技の柔道乱取技への影響について探してみたい。「起倒流の形」の技の原理は次のようである(表3参照)。

表3 「起倒流の形」の技の原理

表14形		裏7形	
体、夢中	体さばきで崩して投げる	身碎	前腕を制しての捨身技
力避	体さばきで組まずに倒す	車返、水入	上腕を引き崩しての投技
水車、水流 曳落	関節技（前腕部を掴む）から投 技への連絡	柳雪、岩波	当身技から投技への連絡
虚倒、打碎	当身（手刀）の攻防から投技へ の連絡	坂落	前腕を掴んでの投げ
谷落、車倒	後方攻撃に対する捨身技	雪折	後方攻撃に対しての背負投
鋳取、鋳返	首を制しての投技		
夕立、滝落	襟と袖を掴んでの投技		

こうしてみると、「起倒流の形」は投技が多くその内容は横捨身技や背負って投げる技で占められている。そして21本の「形」全体に見られるのは、本体（今日の自然体に相当）を保ちながら相手の力を利用して崩して投げる、といった投技の原理を教えている。また当身や関節技も殺傷を目的とするのではなく、投技への連絡として用いられている点に特徴があった。嘉納は、明治14年（1881）に22歳で起倒流の飯久保恒年に入門し2年後に免許皆伝を受け、講道館創設後も稽古を続けた。そして、明治20年頃には「起倒流の形」を講道館に残し、同34年（1901）には改良を加え「古式の形」として保存したのである。この「起倒流の形」の柔道乱取技への影響としては、起倒流の横捨身系統の技は自分の体を仰向けに捨てながら前方へ投げ捨てる技であり、柔道の捨身技「横分」に影響を与えたといえる。また、起倒流の「谷落」は今日の捨身技「谷落」に受け継がれ、「雪折」は後方から抱きかかえられた時に背負って投げる技であったが、今日の向かい合っただけの背負投に影響を与えたといえるだろう。

7. まとめ

江戸時代初期、茨木俊房が構想した「乱」に起倒と名付けたのは沢庵であり、起倒とは物に居つかず自在な心身を表しており、当初は「起倒流乱」と呼ばれた。2代目・寺田満英になると起倒流組討（柔術）の名称となり、21本の「形」と「五巻」中の『天巻』『地巻』『人巻』の三巻が作られて教習過程が整う。また初心者には必須の教えに『本體』があり、『起倒流柔術記録全』によると、本体とは技と心理を磨き事理一致を求め「形」や相手の所作に捉われず天地一体の空機を扱うことであった。空機とは丹田を鍛えて天地一体の自然の境を得ることであり、起倒流の技数は少なかったが、「形」を通して偏しない姿勢（本体）や心気の扱いが重んじられた流派であった。

嘉納は明治14年から飯久保恒年に起倒流柔術を学び、講道館創設後も修行を続け「起倒流の形」をそのまま残したが、明治34年に「古式の形」に改名する。両者の「形」は摺り足で掛声をせず呼吸が重んじられた点は同じであったが、技の名称には5つの違いがあった。また「起倒流の形」の「體」「引落」「夕立」では相手の頭や首を押し下げて投げるといった荒々しい実践的な技であったが、「古式の形」では相手の胸部を押し下げて襟をつかんで体勢を崩して投げるといった安全性に配慮した技となっている。「形」の順番では、「起倒流の形」7番目の虚倒は「古式の形」8番目の打碎うちくだきに相当し、8番目の打碎は「古式の形」7番目の虚倒ムナタオリに相当した。これらは嘉納が安全性や美的情操を考慮して改変したと考えられる。

起倒流柔術は、18世紀中頃から「形」を行う際に取の技が理に適っていない時は受は倒れないという「残り合い」が生まれた。「残り合い」の目的は、お互いに本体や崩しがなされているかを確認する方法であり、あくまで「形」を補足する形態であった。しかし、幕末には「乱稽古」が登場し「残り合い」よりも攻防が自由に行われ、今日の乱取に近いものとなる。ただ、稽古衣の袖も下履も短く怪我が絶えず、嘉納は講道館創始後にまず袖丈を伸ばし、明治41年には下履も長くして体落や背負投などの手技も自由に施せるようにしたのである。起倒流柔術の本体の構えや相手を崩してから投げる投技の原理は講道館柔道に伝えられ、また起倒流の横捨身技は柔道の「横分」に起倒流の「谷落」は柔道の捨身技「谷落」に、起倒流の「雪折」は背負投などに影響を与えたのである。

注

- 1) 中林信二は『武道のすすめ』の中で流派成立の条件として3つの点を挙げている。第一に天才的な人物の出現、第二にその技法が高度なこと、第三にその技法の体系と教習過程が整備されており、それを秘事伝授すること等を挙げている。
- 2) 乱取を比較的行った系統として鈴木派もある。幕府の老中であつた松平定信は鈴木邦教（起倒流5代）より起倒流柔術を学んだことで有名であり、また乱取とみられるべき方法で松平を導いている様子が『御行状起料』に見られる。

引用文献

- 1) 老松信一（1982）：日本の武道 柔術、講談社、113頁
- 2) 柳生十兵衛三厳（1637）：月の抄、野島出版（1971）
- 3) 同上
- 4) 茨木又左衛門尉俊房（1642）起倒流乱授業目録、起倒流目録序、佐賀県立図書館蔵
- 5) 寺田正浄（1729）：登假集、渡辺一郎編（1979）武道の名著、東京コピー出版部、175頁
- 6) 同上、165頁
- 7) 貞庵（1745）：本體、『日本武道体系第六巻』同朋社出版 372頁
- 8) 吉田奥之丞（1836）：起倒流柔術記録全、富山県立図書館蔵、
- 9) 同上
- 10) 白井亨・吉田奥ノ丞（1836）天真白井流兵法警咄留、富山県立図書館蔵
- 11) 前掲8)
- 12) 前掲10)
- 13) 今堀吉之助（1792）：天巻、『日本武道大系第六巻』、同朋社出版、373頁
- 14) 前掲5) 176頁
- 15) 前掲8)
- 16) 同上
- 17) 同上
- 18) 同上
- 19) 前掲5) 181頁
- 20) 前掲8)
- 21) 村上邦夫（1921）柔道形解説、有効の活動7（9）、35-36頁

-
- 22) 村上邦夫 (1921) 柔道形解説、有効の活動、7 (1)、25頁
 - 23) 前掲書 25-26頁
 - 24) 嘉納治五郎 (1913) 柔道概説、講道館『嘉納治五郎大系』第3巻、1987年、108頁
 - 25) 寺田正浄 (1764) 燈下問答、渡辺一郎編『武道伝書集英』第3集、1981年、36頁
 - 26) 前掲8)
 - 27) 竹中鉄之助 (1858) 起倒流組討心持目録、
 - 28) 嘉納治五郎 (1930) 柔道第1巻第4号、2頁